

【学生による ESD 学習支援活動】

奈良市富雄第三小中学校 第5回ユネスコ委員会 支援報告書

英語教育専修 修士1回生 谷垣 徹

国語教育専修 2回生 奥平 茜

1. 日時 平成30年9月12日(水) 14:00~16:00
2. 場所 奈良市富雄第三小中学校
3. 参加者 奈良市富雄第三中学校ユネスコ委員会の生徒、教員3名
谷垣徹(大学院生)
奥平茜(学部生)

4. 概要説明

平成30年9月12日に、奈良市富雄第三小中学校でユネスコ委員会が行われ、私たち学生はその支援に携わった。今回のユネスコ委員会はビオトープ班と国際交流班とに分かれて活動を行っていた。

ビオトープ班では、夏休みに行った作業の報告と、ビオトープに関する広報についての計画を立てていた。国際交流班は、間近に迫った海外提携校との交流の準備を進め、歓迎会やプレゼントの準備を中心に活動していた。

今回の活動の支援に携わって、私は主に2つのことについて考えた。1つ目は話し方にメリハリをつけることの大切さ、2つ目は言葉に対する感じ方の違いと似ているところであった。

1つ目の、話し方にメリハリをつけることについて述べる。海外提携校から来る方たちへのプレゼントの作成を進めていたとき、「今回までにやってくる」ということになっていたものをできていないまま、委員会内での作成にも中々集中して取り掛かれずにいる児童がいた。その時、委員会が始まってから柔らかな表情で子どもたちを見守っていた先生が、先ほどまでとは雰囲気の変った



話し合いの様子

毅然とした声と表情とで「やるといっていたのにやらないの。」と声をかけていた。そこで子どもの表情が変わったという光景を見た。「注意するときは毅然とした態度で」という言葉は何度も耳にしたことも目にしたこともあったが、実際に信頼関係のある中でなされた場合こんなにも変化があるのだということを実感した。

2つ目の、言葉に対する感じ方の違いと似ている点について述べる。歓迎会の司会の役職にあたっている子どもたち2人で、英語の司会台本にカタカナで読み方をふるということをしていた。この2人は、どちらも英語に親しみがあるらしく、カタカナをふる中で違和感もあるようだった。なじみの薄い単語の読み方を伝えたり、英語にカタカナをふる話を聞いたりする中で、私も中学のとき同じように、カタカナをふってある教材やテレビなどに違和感があったことを思い出した。読みやすくなってスムーズに言えた方が気持ちを伝えられるという言葉聞いて、言葉は伝えるための手段の一つであるという風に捉えているのだと考え、言葉について「読み方」という形ばかりを伝えていたことに気が付いた。

以上のことについて、今回の支援を通して感じ、気づくことができた。これからの支援や、自分自身の周囲とのかかわりの中でも、伝え方についてもっと深く考えていきたいと感じた。